

状態を克服するには九鬼の力添えが必要であり、そのために岡倉は九鬼の帰国を待ち望んでいたのである。

鑑画会における帰国報告講演

美術取調委員の公式報告書は現在のところ所在不明であり、フェノロサが執筆した報告書草案(『フェノロサ資料』に訳出されている)のみが残っている。これは報告項目を箇条書きにしただけのものであるが、これだけを読んでも美術教育については、フェノロサ自身「視察団は現行の西洋美術教育制度における嘆かわしい無能ぶりを政府に報告した」(前掲書八六頁)と記しているように、徹底してそれに反対の姿勢を示すものであったことがわかる。なお、フェノロサは森有礼宛書簡(前掲書一二七頁)の中で、欧米の美術教育については、「我々は報告書に印刷したら数百頁にも達するような大量の資料を集めました。」と述べている。

フェノロサと岡倉は鑑画会で帰国報告講演を行った。左記はその筆記である。

○鑑畫會フェノロサ氏演說筆記

貴婦人及紳士諸君 久しく海外に在りて相見るを得ず再び諸君が望みある尊顔を拜するを得るハ余の欣喜に堪へざるところなり今や此演壇に上るに當り特に陳列せる物品に付きて批評を下さんより寧ろ十餘ヶ月間外國に在りて見聞せるところを陳述するの勝れるに如かさるを信す十數ヶ月以前の事なりき余の將に出發せんとするに當り余ハ諸君に向て日本美術の將來望みある

を説き日本固有の美術を進暢するハ日本が世界に盡すの義務なりと唱言せり余の本日演せんと欲するところも亦前日の所説に異ならざるなり獨り異ならざるのみにあらず十數ヶ月の経験ハ却て前説を確固ならしむるに至りたり出發前余の主張するところハ日本美術ハ固有の妙所あり之を維持するハ日本の國脉を維持すると同一なれハ國脉上より之を保存發達せざるへからずとの主意に止まりき久しく歐米諸國の美術を取調へ來りたる今日より之を見れば單に此一點より日本美術の保續を説くハ或ハ公平の論にあらざるかの疑なき能はず故に余は今日諸君に向つて日本美術を保存するは世界に取りて大なる利益を與ふるものなりと斷言せんと欲するなり之を概言すれば日本美術は時に或は多少の缺點なきにあらずと雖とも所謂活々として生色あるの美術にして餘他の美術は無機無能死地にあるの美術なれば若し日本美術にして其固有の性質を失はず着々として其歩武を進むるあらば終には世界美術の牛耳を執るに至るべきは蓋し疑を容れざるところなり此説たる敢て余が輕卒の見より出るものにあらず少くとも此美術取調委員が深思熟考且つ之を數多の証左に照し始めて作りたるの結論にして私見又ハ出來心等に由りて妄りに過言をなすものにあらざるなり此説たる實に歐洲諸國美術の沿革に由りて考察せるものにして或は之を歐洲現時の美術教育に照し或は之を美術と工藝との關係に質たし或は之を歐洲諸國美術家の心中に尋ねて始めて結論せるものなり去りながら僅少の時間を以て此等の証左を歷陳する和解にも參らざれば先づ其大要を陳ぶべし請ふ先づ歷史上より之を説かん

歐洲美術歴史を説くに當り亞細亞美術歴史をも附説せんと欲す是れ兩者互に相類するところあればなり諸君の知らるゝ如く亞細亞諸國にありてハ近時美術の衰頹せること誠に歎ずべき次第なれとも古き昔に溯れハ随分高尚なる美術の行はれたることなり抑も如何なる理由ありて昔時東洋諸國に在りて高尚なる美術ハ進暢せしやと云ふに宗教又ハ其他の事情よりして當時の美術家ハ高尚なる思想を有せしを以て其胸間に充滿せし無量の高風雅趣ハ自ら溢れて終に美妙愛すべきの美術を生ずるに至りたることなり然るに後世の美術家ハ之を察せず只管摸擬を主として先傑の名畫を寫取するを務めたるか故に美術次第に其精神を失ひ終に見る影もなき次第に至りたるなり則ち美術上の形狀意匠詳言すれハ線ハ如何なるものなるや色ハ如何なるものなるや又濃淡の配合とハ如何なるものなるやの考へハ全く美術家の胸中を離れて更に其何たるを知るものなく其弊や古風を墨守して敢て改むるをなさず區々たる少技に拘泥して美術の最要素たる眞個の意義を失ふに至り其極や古人の名畫を見るも慣習の固陋に蔽はれ其善否を鑑別する能はざるに了れり鑑定家自身と雖も東洋美術を以て單に其描法にありとなし之を措きて他に東洋美術なるものなしとするに至れり右は東洋美術の小歴史を述べたるものなるが余の此言を陳述するは蓋し歐洲美術の衰頹に説き及ぼすべき前提となさんと欲するに由りてなり

數百年以前に在りて歐洲美術の郁々として見るべき者ありしは美術家の心中に伏藏せる高尚なる思想を寫出せし爲めなりき此時に當りて美術大に進歩し美術の法格則ち線、色、濃淡の配合

等大に改良するに至れり是れ恰も東洋美術の盛大なりし時と同じく美術家の心中に埋伏せる風雅の趣きは禁せんと欲するも禁する能はず溢出して終に高傑和合の美觀を呈するに至りたればなり若し當時以太利のフヒーボリ^{フヒーボリ}氏と宋朝の李龍眠と相知らしめば互に胸中の風韻を吐きて其意匠の巧拙を比較せるに相違なし斯くて十五世紀にありて美術の法格將に全成せんとするに當り不幸なる哉二個の事情の爲めに大に美術の進歩を害し終に後人をして歎息の聲を發せしむるに至れり二個の事情とは何ぞ

一に曰く美術家は其手術に傲りて之に固着するに至りたること若し夫れ手工に固着せず意匠を先にして形狀を後にせは美術の衰頹まさか今日の如くにはなるまじきに唯夫れ手工に固着し摸擬に流れたるの故を以て歐洲美術も亦東洋美術と其運命を同うするに至れり尤も東洋と西洋とは其風俗も違ひ慣習も異なり宗教も學術も凡て同一ならざることなれハ美術變遷の趣きも亦大に同しからず東洋にては單に形狀を尊ひ他人の筆意を摸倣するに至りたるも歐洲にては當時理學の發達せる爲め何でも實物の色及形狀を顯はすを務むるに至れり昔時美術の盛なりし頃は所謂畫伯なるものは實物を寫すに其實物を器械道具の如くなせるも後世の人は實物に拘泥するの餘り却て實物の奴隸となるに至れり是れ獨り西洋美術のみならず東洋に於ても亦然るものなり是れ他にあらず(第一)實物の高下雅俗を分別するの能力を失へること(第二)美術の本軀を失へること等に由りてなり右の次第にて畫工は終に實物の高下雅俗を鑑別するの能力を失ひ言

ふに言はれぬ下等の地位に陥落せしか其結果たる十六世紀の中心に當りては繪畫は單に物牀の形狀を表はす者に限るとなし之を除きて他に繪畫則ち美術なしとするに至れり之より第二因に移らん

二に曰く千年以上空しく埋没して曾て人の知らざる羅馬時代の形狀當時に至りて漸く人に知らるゝに至りたることは迄世人の見聞せざりし種々の彫刻物を掘出すものあれば又古利を穿鑿して古き記録杯を發見せしものありしか當時の學者美術家は歎賞の餘り頻に之に摸倣し已に亡き數に入れる羅馬の文物を恢復せんものと思込み終にリイサンス古物復古の大勢を來し其勢の猛烈なる當時社會に現存せる宗教道德を容赦もなく破壊するに至れり去りながら當時如斯羅馬風を慕ひしは必ずしも眞個に羅馬文物の風味を嘗め其苦甘を分別せし上のことならず只一時の好手心より起りたるものなり去れば當時古來より傳はれる數多の習慣風俗を破壊せしも決して其代物を生することなく破壊されたるものは破壊されたるまゝにて残りしことなく前述へたる如く理學發達して破壊主義を取りしに生憎や好古心の起りたるか爲めに一層美術上の衰頹を來すに至りたり當時地中より掘出せる彫刻物なりとて各地の博物館に陳列するものを見るに一として羅馬人の意匠に出るものなく多きは羅馬人か希臘(ギリシャ)の美術に摸擬せしものなりとす希臘美術の高尚なることは勿論のことなるが當時歐羅巴人は希臘美術の本色を知らざるの証據は佛國ルーブル博物館に於て希臘の美術彫刻物等を近年まで人の知らざる倉庫に藏し置きたるの一事を以て知るべきなり唯此一事のみ

にても當時の美術を衰へ志めたる重因なりとすべきに況や理學は破壊主義を執り誤りて美術を退歩せしむるの媒介となりたるに於てをや又況んや好古の風頻りに流行して理不理となる羅馬に摸擬せんと欲するに於てをや僅々三十年間の中に美術の衰頹を來たせるも亦怪むに足らざるなり勢ひ如斯なれば矢張り東洋諸國と同志く意匠もなく何もなくして作りたるつまらなきものを以て美術となすに至れり當時一定せる美術法とも申すべき墨繩様のものあるか此美術法こそは則ち今日に傳はりて尚ほ歐洲美術學校の遵奉するところのものなれ假令ひ美術澆季の時代とは云へ規則でも造る人ときさへ云へハ矢張り一通りの人物なるか故に後人は此美術法立案者を以て神の如くに思ひなし却て其以前に棲息せる眞正の美術家をば看過するに至れり去れば今日の有様にては前述の二大原因よりして美術とは形狀を摸擬するものなりとなすに至れり

右に述ふる所を以て歐洲美術衰頹の沿革を知るに足るへし今や歩武を進めて美術衰頹の五原因を列舉せんに

第一 東西を論せず美術は意匠より湧出る者なるを後世意匠を先とせざること

第二 美術の手法に拘泥して美術の法相を失へること

第三 謬説に惑溺し古代の大家を忘却したること

第四 誤法を以て眞法となすに至りたること

第五 今一の添加すべきことあり昔時歐洲美術の盛大なりし頃は図案者と圖工と同一なりしも後世に至り兩者互に相分離するに至りたることはなり去れば現時歐洲の油畫を畫くものは眞乎たる美術の考案に適せざるなり

等なり

議者或は問ふ將來美術の教育は之を西洋流にすべきや之を日本流にすべきや將た之を混同すべきや或は然らずして之を折衷すべきやと余を以て之を見れば數者皆誤れり是れ蓋し東西何れも美術の弊害に沈溺するものなればなり之を例せば山嶺に一泉あり流れて二川となる一は赤土を流るゝが故に其海に入るや水色稍々赤を帯び一は粘土を流るゝが故に其海に入るや水色稍々黄色を帯ふるとなさん今此兩川互に他川の我流に同じからざるを以て相嗤するを為さば是豈に大誤にあらずや何となれば二川何れも汚濁して其本色を失ひ鳥の雌雄未だ容易に判すへからざればなり今日日本流を以て西洋流を尤め西洋流を以て日本流を笑ふも亦毫も之に異ならず必竟各個其流の濁れるを知らず誤謬を信じて眞となすの過ちに坐するなり去れハ二濁流を合するも一清流を生ずる能はさると同志く日本流西洋流を合するも決して眞正の畫法を生ずる能はす只之を生ずるの一法は遠く源泉に溯りて之を清むるにあるのみ西洋美術日本美術未だ必ずしも弊なしといふを得されは是非とも其源泉に溯りて之を匡正せざるへからず之を匡正せんには亞細亞の美術を以て基本となし交ゆるに西洋美術の長所を以てせざるべからざるなり然るに日本美術は其本流に溯ること之を西洋美術に比すれば頗る容易なるの有様なり西洋にては美術の眞流已に涸れて其跡を認むるに由なしと雖も日本にては全く之に反し數百年打續きたる封建制度と京都明媚の景色とは大に文人畫の流行を妨け美術の眞流を將に涸れんとするに維持したり余は將に斷して言はんとす歐洲にては天

晴れなる畫伯と雖も美術の弊害を改正して清流に溯らんとするものなしとは蓋し數百年傳はり來りたる美術教育法は到底之を成し得されはなり日本に於ては其有様全く相反す日本に在りては僅かなりとも美術の清泉を涵養せるものありて今日尚ほ處々に存在するものあるを以てなり現時日本の畫工其數百に百のみにあらず此等の林立する畫家をして昔日の眞美術に歸らしむるは敢て至難の事にあらざるなり余の考ふる所にては西洋にても東洋にても未だ美術の極點に達するものといふへからず去れば此幼稚なる美術をして其極美の地位に至らしむるは實に日本人の自ら當らざるへからざる責任なり

以上歷史上の御話を申上げたれば是より進んで一身上の談話を申述ふへし余か美術取調委員として歐洲を遍歴するの間屢々歐洲畫伯の許を叩きたることあり彼等皆愕然として曰く何とて子等は萬里の山海を跋涉して特に歐洲美術取調の爲めに來られたるや只恐る歐洲美術の澆季に流れたる一物の子等に報ゆるところなきを如かず速かに日本に歸らんにはと夫の美術の中心として久しく世に知られたる佛國の美術家の如きも亦此言を以て余輩に告げたり且つ曰く日本美術の醇乎たるを以て歐洲美術の爲す所に倣ふは是れ自殺を行ふに同じとは是に至りて余は殆んど之か答辯に苦めり唯曰く余輩の此行敢て歐洲美術の方法を習ふか爲にあらず唯其理論を聞かんと欲するのみと實に今日の有様にては彼等歐洲美術家は到底現時の方法を以て永續すへからざるものとなし他の方法によらざるべからざるを説けり謂ゆる歐洲の畫伯と稱するものは美術學校の養成する所にあらずして美術

學校以外に養成せらるゝ者なるを見ても亦以て歐洲美術方法の頼むへからざるを知るに足るべし美術學校の畫伯を出さず畫伯は皆美術學校以外の養成するところなるは最早疑なきの事實にして美術家の大に慷慨するところなり數年以前の事なりき佛國有名の畫家ミレー、ドービニー、バスタヤン、ラバール等は美術の衰頹極れるを歎し源泉に溯りて清流を酌まんと欲し謂ゆる美術復古策を企てたり此派の一人にしてミレーと云へる人は曾て其名も世人に知られざりしか余輩か今年佛國に到着するに當りて始めて世間に知られたる位なり余の察するところにては歐洲の先見家は胸中必す思ふならん將來美術の改良は必ず亞細亞より來らざるへからず歐洲にありて古代の繪畫を研究するの風近時漸く流行するに至りたり以太利のボテチエリー、ブヒリポリビ―等を研究するに趣きたるは誠に近時の事なり惟ふに昔日にありては人の之れを顧みるものなかりしならん今日に於ては此等有名なる寫真幾千枚となく賣盡さるゝも少し以前には人の之れを買ふもの絶えて無かるべきなり余の此言を陳述するは將來歐洲の美術如何なるべきやを言はんと欲すればなり

去りながら歐洲人は如何にして昔日の美術に復すべきやを知らず其近時漸く美術の進歩を來せしが如きも日本又は東洋美術の力を假りてなり去れバ前に列擧せし美術家の如きは切に日本美術家が其方針を示さんことを希望し日本にして然るべき美術學校を設立せハ歐洲より數多の生徒を留學せしむへしといへり尚一言申述べたき事あり他なし經濟上美術を保存するの大利あること則ち是なり前已に述べたるか如く歐洲にては好き考案をなすものなし是れ蓋し前陳の畫格の已に絶えたるを以てなり今

日に在りては始めて畫格の必要を知り之を圖案學校の科目に編入するに至りたるも尚歐洲人は眞正美術の何物たるを知らず純正美術、應用美術、粧飾美術と分別するの弊を脱せざるなり歐洲にありては粧飾物を畫として論ぜず此原素を以て美術に必要ならすとなすか如きは全く眞正美術を知らざるか爲めなり此の如く歐洲美術家は眞正なる美術上の考案なきか爲めに三百年來眞正の畫を鑑別する能はざるに至りたり今此弊を匡正せんには日本先づ之か首唱たらざるへからざるなり唯夫れ美術の弊風を匡正するの力は日本已に之を有するか故に日本の貿易は宜しく此力に由りて進まさるへからず若し妄りに歐洲美術を輸入するの愚策を取らば其損失たる蓋し少小にあらざるへし若し然らずして日本美術固有の本色を失はすんは歐洲人の之を見之を買はんか爲に來るもの年一年より多からん

『大日本美術新報』第四十九号。明治二十年十一月三十日

◎鑑畫會に於て文學士岡倉覺三氏演說十一月六日

フェノロサ氏は既に詳細の演說ありたれば余が演せんと欲する所は別に特別なる旨意あるには非ざるが氏も言はれし如く東西兩洋の美術は二流の源を同せる泉の如し余ハ之に就きて尙少しく述べんと欲する所あれば暫く諸君の清聽を煩さんと欲す美術の事漸く世人の注意を惹起すの今日となりたれば第一に世人の論議に關はる所は東西兩洋の美術何れを取るべきかの問題是なり此れ實に一般の生活、工業にまれ貿易にまれ甚だ大切な事にして例へば家屋建築に關しても東西兩洋果して何れを優れり

とし何れを適當なりとすべきか或ハ室内の裝飾器具の撰ひ方衣服の模様等に至る迄今に於て之を擇び工藝貿易等に從事する人は此に由て將來事業の方向を定めざるべからず本會の如き或は急進の西洋派なりと評せられ或は頑固の日本流なりと批せらるゝ事あれば此度余が外邦の美術を歴覽したるの末本會の主義を定むるは最も必要なりと思ふ故に余は四種の論題に就き聊か論辯を試みんとす本題の論者凡四種あり

第一 純粹の西洋論者

第二 純粹の日本論者

第三 東西並設論者即ち折中論者

第四 自然發達論者

今日の情況たる風俗に制度に衣食に建築に競つて泰西の餘瀝を嘗め善惡適否の差別なく西洋とさへ云へば盡とく之を用ひ東洋と斗り聞きて盡とく野蠻視するの有様なれば美術上にも此風潮は達して西洋美術論者を出現せり其説は西洋の畫法を除きては他は一切繪畫とするに足らず西洋の彫刻の外には別に彫刻とするものなしと曰ふに在り然れども余は是等の先生に向つて少しく質問したきものあり今日流行の學者が天下の事を論ずるに當つて必ず歐羅巴^{「ヨーロッパ」}に於ては此の如し亞米利加の風は此の如しと口を開けば忽ち歐米の例を引證せざるはなし此節の論文杯にも「故に歐米各國に於ては」の文字を挿まざるもの蓋し稀なり然るに歐米なる者は果して何處に在る乎歐米の諸國は皆制度沿革を異にし宗教も風俗も一定したるものに非ざれば甲國に是なることも乙國には非なること其例なきに非ず一概に歐羅巴と論じ

去れば立派に聞ゆれども實際の處にては歐羅巴なるものあることなし烏拉山^{「ウラシ」}の西亞士蘭海^{「アトランティック」}の東伊太利^{「オーストリア」}あり埃太利^{「フランス」}あり佛蘭西^{「フランス」}あり日耳曼^{「ゲルマン」}あり大不烈顛^{「フリテン」}ありと雖も未だ歐羅巴なるものあるを聞かず美術も亦此の如し一概に西洋美術と論ずるは容易なれども細かに之れを鑑みれば上古埃及^{「エジプト」}及亞士利亞^{「アッシリヤ」}に遡り希臘の隆盛を考へ羅馬の模倣を鑑み中世諸邦の衰滅を比照し伊太利復古の原因を研究し現今の諸邦の特質に基き其美術の異同優劣を審定せざるべからずかゝる美術上の現象安ぞ一概に歐米の二字を以て之を同一視するを得んや單に伊太利國の一都府なるベニスに於て起りたるベニシヤン派の畫風のみを以て之を見るもカルロ、クリベリー又はバサイチの作を以てチントレット等の作に比較せば全く別派の感あるべし猶古祐清の畫と伊川晴川を同じに狩野派と稱するが如し其他の各派皆然らざるなし而るに日本に於て西洋風を習ひたる先生方は一種の手法を以て普通無二なりと斷定し他の畫派に更に棄て顧みざるものゝ如し佛掌薯^{「つくねいも」}の山水を夏珪馬遠と並稱して支那の山水なりと曰はゝ宿瘤無鹽を玉環飛燕と併論するの類なるべし伊太利十五世紀の美術ハ殆んど其極點に達し意匠の高尙なる法格の淳雅なる之を唐宋の名手に比し巨勢宅磨と日を同うして論すべきものなれども是れハ昔時の榮華にして今日の美術ハ一般の衰頹に歸せり是小生一個の偏見に非ず外邦の人皆自ら歎息する所なりリヲナルド、ダビンチハ氣韻幽遠にして李公麟の風采ありフラ、アンゼリコハ高雅沈密にして春日基光の後身ならんかベルヂノハ清潔にして梅花の骨相を含みボテチエリハ溫淳にて春雲の岫を出るが如しラヒエルの秀

逸マイケルアンジェロの豪健活潑にして龍の大地に蜿蜒するが如きハ皆吾人の愛敬貴重の念を喚起するものなり然ども近代の
人空しく寫生の奴となるに非ざれば畫法の番卒となるに過ぎず
此衰頹を挽回せんとして英佛の識者が近年大に盡力し今日の美
術論ハ實に面目を一新するに至れり其挽回の方法ハ大牀二種あ
りて一ハ古代の大家の大家たる理由を考究し美學の原理に基き
て改良を計るものはなり第二ハ美術の新法を東洋殊に日本に求
むることはなり巴里美術大學校の教授にて有名なる美術家ギ
ョーム氏ハ本年の春著るしき演説をなしたり其要旨は是迄の美
術を論ずる者は單に歐洲諸邦に起りたる美術沿革を説きたれば
論説頗る偏見に陥れり將來の美術論は東洋美術を併せて論ぜざ
る可らず西美術は希臘を主として之を論じ東美術は日本を主と
して之を説かざるべからず」と明言したり學士社會の此の如く
なれば世間も同じく此に傾き伯林倫敦の博物館を始め米國各府
の美術館に於て巨萬の財を投じて日本美術品を購入せり其他佛
國に獨逸英國奧國等の圖按學校に於ては日本の繪手本を用ひざ
る所なきに至れり此に由て之を見れば日本人が西洋美術々々
無暗に噪ぎ立つれども彼方には從來の美術を持餘し却つて東洋
に問ふ所あらんとす美術家たらん者は能く現今の時勢に注目し
輕々しく西洋の眞似をなす事勿れ是より進んで彼の所謂西洋風
なるものを日本に輸入して果して良結果あるや否を説かんとす
凡そ美術は他の社會の現象の如く過去の沿革に根底するものに
して突然に生じたる優曇華に非ざるなり其性質は人種の特質風
土氣候及社會制度の情況等に由て生ずるものなれば之を他の時

代に移すを得ず之を他の國土に用ふる能はず其時代其人民の特
有に屬せり歐洲にも羅甸人種（ラテン）は宙東人種（チャートン）に異なる美術を發達し
目下交通の便利と國境が密接にも關らず互に混和せず又混和を
求めざるは此類なり彼は希臘羅馬の開明に基きて國を建て家を
治めたるものなり我は支那印度の開明に根き今日の組織あるも
のなり歴史を鑑み人種に徴するに豈又同一なるの理あらんや若
し眞に所謂西洋純粹の美術を日本に起さんとすれば萬事全く西
洋の風物を採り髻髪を紫にし眼睛を碧にするに非ざれば到底其
精神を得る能はざるべし是國民國を棄るに異ならず世界全牀將
來の開明は世界の事物を平等同一にするに非ず各國其特質を維
持して共に世界の完全を求むるに在り猶桃紅李白共に天地の春
をなすに異ならざるなり西洋の事果して本邦に適するや否やを
考ふるに一として直に之を實施すべきものなし今建築の一例を
舉ぐれば煉瓦石造の家屋は果して濕氣且熱度なる此地方に適す
るや否其構造は果して地震地方に適するや否現に今年の春伊太
利の北方に通常より少しく大きな地震ありたるに石造煉瓦の
家屋は破壊して生命財産に傷害を受けること少からず伊太利政
府よりハ直に委員を派出して其現狀を取調しめ報告をなさしめ
たり其委員より政府に復命したる所ハ首として石造煉瓦の危險
を説き地震地方にハ木造家屋を主張し且家屋の高度をも制限し
たり同政府にも此報告に據り遂に地震地方家屋條例なるものを
發布せり此事たる日本に於てハ殊に注意を要する報道なり安政
度の如き大顛覆に遭會せば今日の煉瓦家屋ハ果して如何なる面
白き夢を見るべきか心ある者ハ猶能く考慮するを要す建築に限

らず他の美術上にも同様の事鮮少なからず宜しく鑑むべきなり猶歩を進めて貿易上所謂西洋美術の適否を試験せんとす本邦外國貿易に關してハ美術工藝ハ將來最も重要な位を有するものなり今日迄日本が泰西に知られたるハ其學術の深妙なるを以ての故に非ず其器械の精巧なるの妙に非ず又其外國風俗を摸擬するの敏捷なるの故に非ず其美術の神采自から塵を脱するが故なり此風潮に離れず能く外國市場の嗜好を支配するに至つてハ將來輸出上の首位に登るハ疑を容れざるなり然り而して外國の市場に散すべき美術品は特に日本の雅致を存するを要す若夫れ之に反し外國の形狀に基き製造せんか之を顧みる者なきや必せり加之所謂西洋流の畫家は最も考按に適せざるものなり蓋し彼に純粹美術と應用美術の區別を設け畫家と圖按家は故らに隔離するの勢あればなり此點は重要なれば後會に於て更に詳明する所あるべし以上の理由に據り純粹に西洋風を主張するは日本の爲め甚だ不利益たるを免かれず

(第二) 是より純粹の日本論者に向ツテ更に質問すへし此黨の美術論者は常に日本固有の字を口にすると雖も日本固有なる者は果して何處に在る乎日本美術上古はいざ知らず美術が始めて形をなしたる時より今日迄の沿革を考ふるに變化萬端にして孰れを日本固有と定むる能はず天平の美術は其淵源を三韓に取り延善の美術は之を唐朝の文化に受く東山の隆盛は宋朝の禪味に基き桃山の燦爛は朝鮮征伐と和蘭の關係に根ざせり元祿享保は明人の糟粕を嘗め天明寛政は清人の風歎を追へり日本固有果して何れの邊に在るか從來日本に起りたる諸派の美術其精妙非

凡にして東洋に屹立したりと雖も今日は衰頹して情なき世とはなれり衰頹の原因ハ多少異同あれども大跡西洋諸邦美術の衰頹に髣髴たり之を挽回せんとして單に古代の美術を考究したらんには却つて摸擬に陥り眞正活潑なる開達を望むべからず將來の日本ハ過去の日本に非ざるなり封鎖三百年の昔日を以て世界運動の要地に當る今日と同一視すべからざるなり貿易上外國の需用に應ずるに於てハ外國の事情生活に通ぜざるべからず時勢と共に移らざるべからざるなり故に單に固有の美術を保存する者ハ現時に生存する能はざるなり

(第三) 近頃随分伶俐なる論者ありて東西洋の美術を開設すべしと主張せり是ハ現今社會の如き昔日の事物破れて將來の目途未だ定らざる變遷の時期に在てハ往々生ずる無主義の主義なれども前にも論ずる如く所謂東西の美術ハ共に不完全にして獨り之を設くるも其益なきものなれば併せて之を設くれバ却ツテ其害を増すのみ此流の論者ハ唯だに美術に限らず他の社會の事も概ね此の如く昨日ハ東今日ハ西と打靡きて單に經濟上に於ても害を蒙ること少なからず豈歎息に堪ゆべけんや余曾て美術の問題を挟み歐洲大陸の或有名なる畫家の門を叩きたり談論の末先生余に向ツて曰く「近頃聞く所に據れば日本に在ては萬事英獨等の風物に擬せられ宗教の如きに至つても耶蘇教を入れられたる由去れば余は日本人に向ツて勸告すべき一種の宗旨あり自信宗是なり此宗を信ぜざれば唯他の皮相を眞似るに過ぎず到底卓然たる國柄にハなり難し」と是實に耳痛き論なれども日本人の輕卒に變化するの事實あるを奈何んせん戒むべきなり

(第四) 以上三種の論消滅したれば第四の自然發達論に據ざるを得ず自然發達とは東西の區別を論ぜず美術の大道に基き理のある所は之を取り美のある所は之を究め過去の沿革に據り現在の情勢に伴ふて開達するものなり伊太利の大家中に在て參考すべきものハ之を參考し畫油の手法も之を利用すべき場合に於てハ之を利用し猶更に試験發明して將來の人生に的切なる方法を探らんとす是鑑畫會が常に信行する主義にして小生等が疑を容れざる所也日本の美術家諸君よ美術は天地の共有なり豈東西洋の區別あるべけんや宗派ハ弊の家宅なり胸懷洞然以て精神を發表せば必ず美術の妙に至らん自から信じて亦疑ふこと勿れ美術事業ハ皇國の光榮に關し下ハ貿易の消長に係れり諸君の責任重し世間の諸君盡すべき義務も他日其重きを加ふべし勉めて其精神を存養し他日の大成を期せられんことを乞ふ自から信じ亦疑ふこと勿れ

『大日本美術新報』第五十号。明治二十年十二月三十一日

フェノロサは先ず結論から述べ、欧米視察によつて却つて從來の所説に確信を深めたとする。欧州諸國の美術の沿革や現行の美術教育、美術と工芸との關係、美術家たちの意見等を調査した結果、世界の中で日本美術だけが多少欠点はあるにせよ活々として生色ある美術であり、今後もその固有の性質を失わず、アジアの美術を基本として西洋美術の長所を交えることによつて欠点を補いつつ前進するならば、世界の美術の進展にも貢獻しうる偉大な成果が生れると確信したものである。そして、現今の西洋美術は東洋美術と同じ

様、まさに衰頹の極にあり、美術教育法も信頼できるものではないので、日本は独自の方法をとるべきであるとし、またその際は東西美術衰頹の原因であるところの(一)意匠よりも形状模擬を重んずること、(二)美術の法格(線、色、濃淡の配合)を失ひ、技法にのみ拘泥すること、(三)古大家に学ぼうとしないこと、(四)図案者と画工との分離、という四項目に注意すべきであると主張している。

岡倉の演説も主旨はこれと同じであるが、彼の場合は鑑畫會の今後とるべき方針ということに焦点を絞つて論じ、先ず、世間には日本美術の將來をめぐつて四つの主義が存在するとし、一つ一つ論駁して最後の「自然發達論者」の主義こそとるべきであるとしている。この主義については「東西の區別を論ぜず美術の大道に基き理のある所は之を取り美のあるところは之を究め過去の沿革に據り現在の情勢に伴ふて開達するものなり」と説明しているが、それはあくまでも「凡そ美術は他の社會の現象の如く過去の沿革に根底するものにして突然に生じたる優曇華に非ざるなり其性質は人種の特質風土氣候及社會制度の情況等に由て生ずるものなれば之を他の時代に移すを得ず之を他の國土に用ふる能はず其時代其人民の特有に屬せり」ということが前提となっている。これらの、フェノロサ・岡倉の報告演説には、当時の明治美術が直面していた諸問題が生々しく読みとれるが、ここではそれには深く触れないことにする。なお、右の主張は、やがて東京美術学校が開校するに及んで同校の基本路線となった。

以上がフェノロサと岡倉の帰国後の見解であるが、滞欧中美術取調委員長を勤めた浜尾新の見解もそれと同じであつたことが左記の

記事によって推察される。

○美術學校 今度文部省に於て美術學校を設立せらるゝにつきてハ本會も密着の關係あるにより其局に當らるゝ濱尾新氏に就て趣意組織等のあらましを問ひ合せしに凡そ美術ハ繪畫にまれ彫刻にまれ本邦固有の妙技を振作發揚するをもて目的とし就中繪畫の如きハ古來他國の決して模倣すべからざる天賦の妙能を開發し愈々字内の信用を博せんとするにありと又同氏が先頃政府の命を受けて美術取調への爲め本會名譽會員フェネロサ氏等と共に歐州巡廻中見聞せられし有益の談話ありき尙詳しくハ追て報導すべし

『繪畫叢誌』第七卷。明治二十年十月三十日。東洋繪畫會)

視察中の購入圖書・写真

欧米視察中、参考圖書、写真の購入も行われ、次に掲載する目録のものが東京美術學校の文庫に収められた。(目録の後半はドクター・ビゲロウが東京美術學校開校に際して寄贈した洋書の目録である。開校当初の洋書収蔵状況を示すために併記した。)

美術取調委員購入洋書・写真目録

東京芸術大学芸術資料館旧台帳による。

これらは東京美術學校文庫所蔵を経て、東京芸術大学附属図書館蔵となった。() は同館藏書中、該当すると思われるもの。

明治二十二年四月一日(登録)

No.13 W. Lübke

Rafaels

Lunfun

冊3

ラフエール ウエルケ

Lübke, Wilhelm

Rafaels-Werk

Dresden 1875)

No.14 支那及印度地図

冊2

No.15 イストレーキ著

マテリヤル

フアラ

エ

ヒストリー

ラフ

ライル

ペインチング

冊1

Eastlake, Sir Charles Lock (1793~1865)

Materials for a History of Oil Painting

London 1847~69)

No.16 カニンガム著

ジーンダラヒー

ラフ

インヂヤ

冊1

Cunningham, Alexander (1814~1893)

The Ancient Geography of India

London 1871)